# 橋　戸

令和２年７月１日
学校だより　第４号
練馬区立橋戸小学校
校長　青木　俊哉


## 何があっても『育つ』

校長　青木　俊哉

大泉橋戸公園の水田（**通称「橋戸田んぼ」**）の様子を学校ホームページに紹介し、週一のペースで更新しています。毎朝児童の登校を正門で出迎え、挨拶を終えた後、週に１・２回田んぼへ降りています。学校再開の直前に、学区域を回っていて通りかかったときには、まだ水ははっておらず、レンゲでしょうか花が枯れた後の草が残っている、そんな状態でした。それが、翌週行ってみると田おこしや代かきが済んでおり、まさに**“田植えを待つ”**状態になっていました。次に足を運ぶと**“田植え済”**、その田んぼの変わりように興味をもち、毎週見に行くようになりました。**“田植え後”**の苗が日に日に育っていく様子にも引き付けられました。最初は**“バラバラ”**で頼りなかった苗が、２・３週経つと**“どっしり”**と力強くなり、**“くさ”**の密度が増しています。**“たけ”**も高くなり、**“いろ”**も濃くなっていく姿を見るのが楽しみにもなりました。

この田んぼは、例年５年児童が田植えをさせていただいています。田植えの後も、時折足を運んだり、夏休みの自主学習などでも観察したりし、秋には収穫のお手伝い（稲刈り）もしています。取れたお米は、精米して学校に届けられ、家庭科の調理実習で食味もする、大事な地域の財産ですが、今年は、コロナ禍で、例年通りの活動（作業体験）ができず、残念に思っていました。また、**「橋戸田んぼ」**は学区域の端の辺りに位置するため、土支田方面に住んでいる子供にとっては、頻繁に行き来する場所ではないようで、日常的な接点が失われそうな心配がありました。せめて私にできることはないか…と考え、撮った写真を５年の学級に資料として提供するのと同時に、ホームページにも掲載することにしました。是非ご覧いただければと思います。

この活動は、**「橋戸水田自主管理会」**という地域の皆様の力で支えられています。区の都市農業課とも連携し、私たち学校関係者も加わって、毎年事業について打ち合わせ、進めていただいています。稲を育てるには、何より**“水と土”**が大事です。また、天候や気象条件にあわせた日々の管理も欠かせません。子供たちの活動を支えてくださる地域の力のありがたさを実感するとともに、稲の苗がすくすくと成長する姿を見て、**何があっても『育つ』**自然の強さや逞しさも感じています。担任時代長く勤めた武蔵野市の学校には、１アール弱の田んぼがあり、その管理は５年担任に任されていました。社会科の学習として日本の米作りを学び、総合的な学習の時間に自分たちでも米を育て、機械化された農業と手作業の違いを実体験しました。たまたま、学習を通して庄内平野の米作り農家と親しくなり、学習に協力していただいたことも思い出されます。農業体験など一切なく育った私自身が、**米作りに『育てられた』**一人でもあるのです。

さて、学校再開後二月目を迎えます。**“なんで今年に限って…”**の思いは、誰もが感じるところでしょう。とりわけ６年生など、「自分たちの最高学年の年に、楽しいことがみんななくなって…。」と思いがちです。その気持ちは、とてもよくわかります。でも、いくらそこを嘆いても、今、目の前にある現実は変わりません。だったら、物事を前向きに、自分事として、自分（達）のためになる事象としてとらえて、結果**“得をする”“プラスに働く”**よう進めていけないだろうか…と思います。**何があっても、人も『育つ』**のです。苦しい環境、厳しい境遇の下での経験、大変だったけどやり抜いた（やり切った）人だけが感じる達成感は、必ず自分たちの将来にプラスになって還ってくるはずです。その思いを生かして、学校も、まずはあとひと月、そして２学期以降も、新しい生活様式の下、取り組んでまいります。